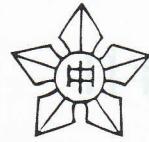


関東せいうん

特集号 さいなら函館東高校

題字揮毫：「関東」＝山名昭二／「せいうん」＝中村隆俊 発行 平成18年4月29日



函館東高等学校関東地区
青雲同窓会事務局
発行責任者 幹事長 田村良人
〒171-0051 東京都豊島区長崎2-35-4
(株) 東洋興産内
Tel. 03(3554)7314/Fax. 03(3554)7313
<http://seion-dousoukai.web.infoseek.co.jp/>

青雲の志、 いつまでも

名誉会長 中村 隆俊
(市中2回生)



昨年の7号に続いて、この度、8号が無事発刊される運びとなり、会報担当者に心より御礼申し上げます。

日頃より皆様には同窓会に深いご理解を頂き感謝申し上げます。

遠い昔を回顧しますと、私は北大を卒業後、昭和25年、東京医科大学にインターンで北海道から東京にひとりでやってきました。しばらく経つと、恋しく思い出すのは私の故郷。だれか仲間はいないかと郷愁に耽っていた頃、同級生の中島喜一郎君や山名昭二君など四、五人を集めて、函館を恋しく語り合っていたものです。

そんな中、母校の同窓会が市ヶ谷会館であると聞いて、参加したのがきっかけで本会を知ったのです。そこで多くの同窓生と出会い、母校を思い、仲間と大いに語り合い、嬉しかったことを懐かしく思い出します。

その後、小西康雄君、葛西眞一君、日比野朋子君達が本格的に力を入れだし、同窓会が活動し始めました。

当時、私の秘書していた柳澤里美(旧姓・相川)君に「本校の同窓会名簿から関東在住者の人を拾いあげるように」と指示を出し、泣く泣く作業をしていた彼女の姿を思い出しますが、そのお陰で、在住者全員に同窓会の案内を出すことができ、現在では2000名を抱える本会へと成長しました。

これまでに会合が一度も滞ることなく継続し発展してこれましたことは、本会の役員各位は勿論、母校、同窓会本部から毎年、総会にお越し頂き応援してくださった皆様のご厚情の賜であります。改めて深甚の敬意と感謝を申し上げます。

一昨年、20周年の記念年に当たり、私の次期会長に朝倉敏夫君を迎えることができましたことには、私にとりまして大変心強く感じました。しかし、論説委員長として業界の中心で働かれる激務の中でのご苦勞もあり、新会長に新山春一君を迎えることとなりました。彼は長年、本会に携わり、組織の大蔵省として実務派で大いに活躍をされ

てきた人物でありますので、頼もしく、現在でも、幹事長の田村良人君や若手会員達の中心となって、我々が築いてきた本会を引き続き、盛り上げて下さっております。

私が確か本会報前号にて、組織のマンネリ化を懸念し、本会次世代へ「組織改革」に取り組んでほしい旨を語ったところ、最近の会合では若い会員の参加が増え、古き先輩方と「青雲魂」で親睦を深められている場が多く見受けられるようになり喜ばしく思います。

また最近ようやく自分でも開けるようになった、本会のホームページも充実してきており、多くの若い同窓生が入会しやすい環境を設けて下さっています。これら全て、彼等の御努力の賜であると改めて感謝申し上げます。

我々母校は昭和15年に創立し、現在で66年を迎えています。これまで中・高等教育の殿堂として、輝かしい歴史を刻み、伝統を築き、全同窓生は25000名を超える道南の名門校として発展して参りました。

しかし、皆様もご存知の通り、少子化に伴い、来年は函館北高等学校と統合致します。同窓生の一人として「函館東高等学校」という歴史ある校名にピリオドをうつのは大変寂しい限りであります。

個人的には母校の校舎がそのまま残るのだから、校名もそのまま存続してもらいたいという気持ちが正直なところ です。

しかし、どのような校名になっても、我々が郷愁に耽るとき訪れる場所があるのだから。それに個々の心にある多くの思い出は決して消えることはないのだから。

私たちの魂の中にふき込まれた青雲の志はいつまでも変わることはなく、本会もさらなる30周年に向かって、同窓生達と手を取り合い友情を深めていって頂きたいと心から願っております。

最後になりましたが、我が同窓生でもあり、政界で国民の為に懸命に活躍されております金田誠一議員が先日、突然倒れました。その後、多くの同窓生が心配されていると伺っております。

現在、彼は私のグループの病院にて入院されております。長島監督の主治医で一躍有名になった当院の内山医師の下で治療を受け、リハビリに励まれております。誠実で常に国民の視点に立って、政治に取り組んできて頂いておられる彼には、是非、また元気になって活躍して頂きたいと一日も早い回復を祈っております。

「校歌誕生の物語」



関西青雲同窓会会長 小林 正孝
(東高12回生)

私達が歌い継いで来た「今蘇る曙の…」で始まる校歌を作詞された第一期生の厚谷悌二さんに新制東高校の校歌のできた経緯と歌詞に込めた思いを自宅に訪ね、話を聞かせて頂きました。

厚谷さん自身校歌のことを話すのは初めてだと言っておりました。

その概要を紹介する。

昨年、森校長からお手紙を頂き、東校「30年史」のコピーと共に、現在の東校生も「青雲祭」をはじめ儀式やその他で、誇りを持って、声高らかに校歌を歌い継いでいることを作詞者である厚谷さんにお伝えして下さいとのことでした。

早速、大阪の交野市に有る厚谷さんのご自宅に伺い、森校長からのお手紙及びコピー等学校の資料をお渡ししました。

厚谷さんは現在の生徒も「今蘇る曙の…」の校歌を誇りを持って歌っていると聞いて嬉しいと話され又「30年史の資料は初めて読みました。今まで、校歌のことを話す機会もなく過ぎて来たが、森校長はじめ先生方や生徒の皆さんに校歌のできた経緯と歌詞の意味を伝えてほしい」と言われ校歌作成の経緯と歌詞に込めた思いを述べられた。

新学制により昭和25年4月函館東高校が発足したが、市立高（東校）、市立女子高、道立女子高（西校）、道立函館校（中部校）の生徒の集まりの上、初めての男女共学で、出身校各々で自治会を作り、笑々でまとまりがなかった。（厚谷さんも函館高校から東高校へ3年生として転入した。）

そこで各々の自治会を廃止し、新たに生徒会を作ることにした。初代生徒会会長となったのが厚谷さんです。

その年の夏頃から先生方と生徒会で話し合い、今後学校がまとまっていく為にも東高校の校歌を作ろうとなった。そこで全校生徒に歌詞を募集したところ16編集まった。それを先生方と生徒会で協議し、2編に絞り、学芸大学の林

喬木先生（当時杉並町に在住）に2編の内どちらかを選んでもらうこと及び作曲をお願いした。

最終的に林先生が選んだのが厚谷さんの歌詞である。

厚谷さんは作詞に当って

第一節 希望

第二節 友情

第三節 人生 という設定で作詞した。

さらに作詞に当って次のようなことも念頭に置いた。この歌詞に最も思いを込めたのは「高校時代に一生の友達、友情」が出来ること。

次に敗戦後の日本の新しい未来と新しい東高校の未来に対する希望。

3番目が函中の校歌は土井晩翠作詞の5・7調で新しい中部高校の校歌も5・7調である為、新しい東高校の校歌は島崎藤村風に叙情的に作詞した。但し、山や川又地名や歴史上の古跡等は最初から入れる考えはなかった。

そうして軍歌調でなく柔らかく歌う歌。

さらに厚谷さんの熱い思いとして新しい東高校を作って行く上で中部高校には負けたくないという対抗意識があった。

厚谷さんは「林先生は叙情的な詞にうまく作曲してくれました」と言われました。

校歌は第一期生の卒業間近かに完成した為、厚谷さんは高校在学中、校歌を歌われた記憶がないとのことでした。

厚谷さんは東高校卒業後東北大学に進み、函館中部高校の先生をされた後道内の高校に勤務され、現在は大阪に住んでおられます。

関西青雲同窓会に出席され私達と一緒に「ふるさと」校歌を歌いますが、この頃体調がすぐれず、同窓会は欠席されるようになりました。

私も東高校卒業後45年になりますが、その間学校を訪れたことが無いので厚谷さんと体調が良くなったら東高校へ訪れようと話をしております。

最後に東高、北高の統合に関連して校歌のことについて厚谷さんの意見を聞きました。

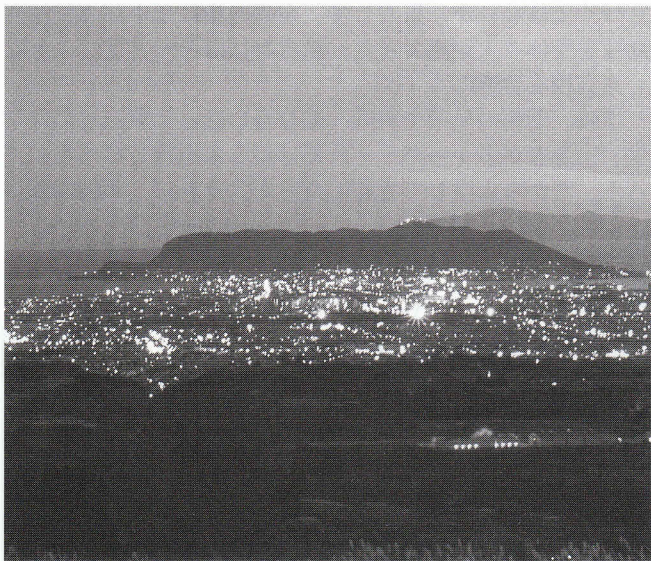
「今の若い人に校歌の意味は分かりづらいだろうし、北高の人のことも考えて統合になったら新しい東高校を作っていくのに相応しい校歌を作して下さい。今の校歌は青雲同窓会の会歌として歌ってもらいたい」と話された。

統合後の市立高校が新しい伝統を築かれることと、新しい高校に相応しい校歌が出来ることを厚谷さん共々期待しています。

一級建築士事務所 株式会社ディール企画

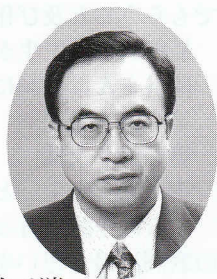
代表取締役社長 野呂 幸司
(東高8回生)

札幌市中央区大通西5丁目8番地
昭和ビル8F
TEL (011) 281-2510



「何も消えない、 消されない」

青雲同窓会札幌支部長 原田 伸一
(東高19回生)



いよいよ来年春、函館東高校の名称が消えるという。いまだに「なぜだ、ウソだろう」という不思議な気がしてならない。青雲同窓会札幌支部でも北高校との統合問題が表面化して以来、成り行きに注目し、**いちろ**の望みをつないできたが、今は深い喪失感を抱いている。統合とはいえ、校舎は同じ場所に残るのだから、あえて名前を変えなくてもいいのに、というのが大方の偽らざる思いだろう。

どこの同窓会も同じだろうが、札幌支部の毎年の総会・懇親会でも必ず校歌、応援歌を歌い上げるのがクライマックスだ。「今蘇る曙の」で始まる校歌が流れると、どんな世代も気持ちがひとつになる。それに、いかにもパンカラで自由な気風を伝える応援歌。これからの後輩がこのすばらしい校歌、応援歌を歌えなくなるのは、まことに惜しまれる。

とはいえ、現実には現実として受け止めなければならぬ。今回で依頼のテーマが「さよなら函館東高校」とされたのは、決別のときが来たことを告げている。

この原稿を書く機会に、手元の**1969**(昭和44)年卒業記念アルバムを開いてみた。川辺哲雄先生を中心に、私も含めて3年G組51人は17歳か18歳。集合写真の一人ひとりが、笑顔を見せたり、かしまったりしている。まさに新たな青春のスタートを切ろうとしているところだ。あれから決して短くはない37年の年月が経った。手垢がつくくらい何度も開いたページだが、校名消失となると新たな感慨を覚える。友の顔を思い浮かべながら、思い出の1頁を綴ってみたい。

実は私たちの学年は、高校入試と大学入試の2回、大波乱に巻き込まれた。まず中学3年生になって、これから高校受験というとき、「今度から大学区制になる。小学区制にこだわらず、実力に見合った高校を受けていいぞ」と先生に指導された。

これには戸惑った。中学校はそれまで東高校の学区だったし、東を受けると決めていたのに、これでは気持ちがぐらつくではないか。果たして、友人の中には中部高校や西高校を受ける人が出てきた。私自身はほとんど迷うことなく東高校を受験した。

当時、周囲の兄弟や親戚、知り合いなどは東高校の在校生、出身者が多かった。それだけ親しみを感じていたのだろう。だから入学しても安心だった。それに、事前に聞いて

ていたあだ名びつたり先生がたくさんいて、おかしかったのを覚えている。思えば私たちの先輩は、先生方の人間描写と言語表現に優れた才能を持っていたに違いない。

混乱の学区制改革から3年後、次の関門である大学入試も思わぬ事態になった。入り口を通過しても、出口でもつまづくのである。当時の社会を揺さぶった大学紛争が頂点に達し、入試まで秒読みの昭和43年12月、東大の入試取り止めが決定、その影響が全国の大学に波及するという前代未聞の混乱となった。東大安田講堂での学生と警察の激しい攻防戦をテレビで見ながら、自分が受験する大学がどうなるのか、大いに不安に駆られたものだ。進学できただけでも幸せだったが、卒業時も入試が一筋縄で行かなかったことは、何か因縁があるのだろうか。

それはそれとして、高校生活は十分エンジョイした。とりわけ、陸上部駅伝チーム主将として、1968年5月の八雲・函館駅伝(約80km、10区間)で強豪グループに割って入り、5位入賞を果たしたことは仲間との友情の証(あかし)であり、ささやかながらも生涯忘れえぬ誇りとなっている。

前年の大会で目標の一ヶ台の成績を逃したので、挫折を繰り返しながらも来年を目指して猛練習に励んだ。

迎えた68年5月の大会。渡島・松山の20校近い高校が参加するこの駅伝は別格の扱いで、直前には全校壮行会が開かれていた。選手は紺色のユニフォーム、黄色のはちまき姿で整列し、応援団のリードで熱い声援を受ける。まさしく「南渡島の風うけて 雷顧問にきたえられ」の成果を発揮するときだった。

私は駒ヶ岳の麓を登りつめる最長の5区(10km)を任せられ、森駅前の中継点では5位でたすきを受けた。だが、緊張したのか体が動かず、4人に抜かれて9位に転落。それでも、そのあと仲間が4人を抜き返し、念願の5位入賞をもぎ取った。ゴールとなる函館山の麓の急坂で、アンカーを待つ間は長く、祈るような時間だった。自分の失敗を仲間と全校の声援が救ってくれたことは、それからの人生に少なからぬ勇気を与えてもらったと感謝している。それだけでも、函館東高校に学んだ意味があった。

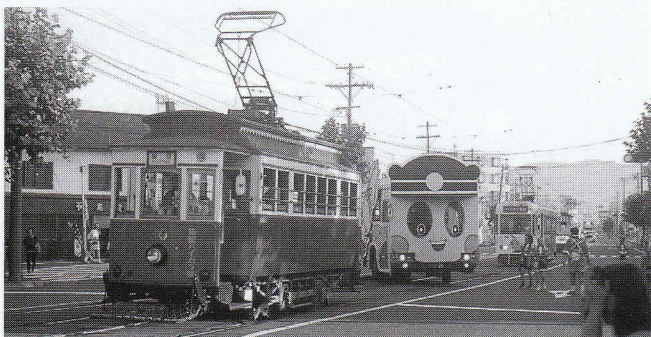
校名や校歌が変わっても、東高校で体得したことは私たちの人生から何も消えないし、消してはならない。それが母校の歴史を伝え、新しい卒業生との交流も可能にしてくれると信じている。(了)

青雲同窓会札幌支部

支部長 原田 伸一

(東高19回生)

事務局 札幌市中央区大通西5丁目8
昭和ビル8階
株式会社ディール企画内



「函館東高校、北高統合 の経過を振り返って」

青雲同窓会会長

平沼 冠三
(東高18回生)



関東地区青雲同窓会の皆様お元気ですか。いつも本部の同窓会活動に多大なるご協力を賜わりまして有難うございます。今年もまた5月下旬には関東地区の総会も行なわれると思いますのでその時にお会い出来るのを楽しみにしております。

さて、皆様方には非常に関心を持ち、且つ心配する部分もあった東高、北高の統合の件も先般3月15日に函館市教育委員会で統合校の校名が「市立函館高校」と決定し、統合についての諸問題もようやく半分位（私の個人的見解ですが）解決したかと思えます。

振り返れば平成13年8月の青雲同窓会総会にて柳沢前会長の後を受け会長職を承った私でありますが最初に直面した大きな難題が統合問題でした。平成14年には早くも卒業生の間で関心のある話題となり、その年の8月、翌15年の11月と2回に渡り、「函館の公立学校再編を考えるフォーラム」が開催され当時の佐藤校長先生らと出席したりもいたしました。以前の「関東せいいうん」にも寄稿させて頂きましたが、現実の問題として少子化の影響は如何ともしがたく又、函館市の財政状況を考えれば統合自体は避けられないものであったと思えます。しかしながら自分自身も含めて母校に対する感情も否定しがたく悩む所でもありました。函館はもちろんの事、関東、札幌、関西と各地区の同窓生の皆様にもその時点で持ち合わせている情報を提供したり、逆に意見や提案を聞き同窓会として統合問題にどの様に対処していくかを考える4年間でもあった思いです。平成16年には、東高校の校舎を母体として平成19年4月を持って統合新設校としてスタートするとの基本方針が発表され青雲同窓会としても新設校にどの様なスタンスで臨むかを検討しそれを基に北高の同窓会役員の方や北高校長先生らと数回に渡って意見交換を行ないました。新設高校に対してはどちらの同窓会も、より良い学校になる様に、現役の生徒の為になる様にの観点からお互いに支援、協力していく事と、新しく設立されるであろう同窓会（名称は未定）の運営に対し指導、協力していく事で基本的に合意をいたしました。又、北高校の同窓会では青雲同窓会が毎年8月14日に行っている総会の様な集まりを行っていないとの事なので、新設校（市立函館高校）の卒業生に対して、教職員、先輩、同期生との旧交を温める場を提供するという観点から青雲同窓会総会への参加を呼びかけたいとの要望を出し、何回かの説得の上で了解を得た次第であります。



す。この様に学校あるいは生徒に対する支援、協力等については合意が得られ易かったのですが、校名決定までのプロセスには当初から困難が予想されました。両校の同窓会共に各々母校には思い入れがあり、非常にデリケートな部分が絡んで苦勞もしました。

まず、両校の校長先生、教頭先生、PTAの会長、同窓会の会長からなる校名検討委員を立ち上げ市教育委員会学校教育課が事務局となり平成17年8月に第1回目の委員会を開催しました。そこでは校名について公募とする事にし、対象は両校の生徒、保護者、教職員、そして同窓生を含む一般の市民については市政広報とインターネットで募集するとの方法論を確認しましたが、この段階で既に両校の校名が入っているものについては校名候補に選定しない事を望むとの意見が出されました。予想はしていましたが意見の段階なので署名運動代わりにもなると考え、関東地区の皆様を始めとして同窓生に広く「函館東高校」で応募して欲しいとお願いした次第です。実際に函館東高校の応募数が一番多くありました。12月に第2回目の委員会が行われ総数で145の高校名から5校を絞り込む作業が行なわれ「市立函館」「五稜郭」「巴」「青陵」「青雲」の五候補を選びました。ここでも東高校を連想させる「青雲」はいかなるものかとの意見も出ましたが校長先生やPTA会長の頑張り 덕분에候補の中には入れる事にこぎつけた次第です。明けて1月6日に第3回目の委員会が開催され5候補の推薦理由を確認し答審の形で函館市教育委員会へ提出し先般「市立函館高校」に決定した次第です。東高校、あるいは東高校に因む学校名に出来なかった事は諸般の事情とは言え、同窓会会長としては残念であり、又力量の無さを痛感して皆様にお詫びを申し上げる次第であります。以上校名決定を含む現在までの統合に関する経過を述べて参りましたが今後は新設高校を実際に運営する教職員や合流する生徒のスムーズな融和やカリキュラムの調整等の別な部分での問題が差し迫っております。「青雲の志」「青雲魂」を母乳とし新しく産声を上げた未来ある新設校に対し青雲同窓会としても今までと変わらず暖かい眼で見つめ、益々立派な学校となる様に支援、協力していくべきかと思えます。

最後に統合問題について関東地区の皆様から、いろいろと貴重な意見や暖かい激励を頂いた事に感謝を申し上げ、関東地区青雲同窓会が益々発展される事を祈念して筆を置かせて頂きます。

樺電工株式会社

代表取締役社長

平沼 冠三

(東高18回生)

函館市港町1丁目32番37号

に、あの日のことが思い出されます。それぞれ各分野で活躍している先輩方とカラオケ、ダンスと夜遅くまで楽しい1泊を過ごしました。

もうひとつは、平成11年1月の新年会を行なった銀座日産ギャラリーでのことです。場所が場所だけに、当日は予想していたよりも出席者が大幅に増え、60名ぐらいと予想して押さえた会場でしたが、最終的には30名以上も参加者が増え、嬉しいやら追加注文やらで大騒ぎになり、新年会は近年になく盛り上がりました。皆それぞれ社会的立場もあるでしょうが、同窓会においては気分は当時の学生のみであり、当番幹事だった私は、階段の隅に座って、当時も会計幹事だった福田氏（東高28回生）と一緒に酒を飲み、語らい、思い出深いひと時を過ごしました。

このような楽しい思い出をさらに増やしてくれたのは、やはり同窓会に所属していたからだと感じます。

新しい校名になっても思い出になるような行事は残してもらいたいものです。



事務局紹介

江波戸ひとみ
(田村幹事長令嬢)

事務局が戸田中央病院から東洋興産へ移転してから早いもので、もうすぐ1年を迎えようとしております。私自身、このような大々的な事務局のお手伝いをした経験がなく、作業の流れも分からないまま、役員、年度幹事の方々にご指示頂いたとおりに作業を進めて参りました。電話でのお問い合わせにも、なかなか的確に回答ができずに、会員の皆様にもご迷惑をお掛けしたことと思います。引き継いだ書類や整理された資料を拝見し、前事務局の方々がこれだけの基礎をつくられたご苦労、21年間守ってこられた重みを感じずにはられません。これからも大切に引き継いでいきたいと感じております。

新・事務局では、対応をさせて頂く事務員が私を含め4名おります。函館生まれ、函館育ち、函館在住経験者、函館が大好き、中には現在函館観光大使をしている者もおります。日常的にナマリを聞いているせいか、逆にナマリが心地よいと感じる面々ばかりで、このたび函館東高等学校の校名が統合により変更になると聞き、これも時代の流れ

とは分かっていても、まるで自分達の母校の事のようにとても残念に思っております。

現在、役員の方々との連絡はメールを主に活用し、事務局内での出来事や状況がすぐに分かるようにし、事務員同士は日々打合せをしております。役員の方々にはこちらが気を遣わなくてはいけないのに、逆に気を遣って頂き、申し訳なく感じる反面、事務局に皆さんが集まると聞くと、お会いできるのが嬉しく、事務員みな、楽しみにしております。世代を超えて皆様と同じ時間を共有でき、達成感を味わせて頂ける、『同窓会』とはこんなに良いものなのかと改めて感じております。前事務局とは比較できないほど不慣れなもので、会員の皆様には不安感を感じさせてしまうのではないかと危惧しております。これからも皆様にはご指導頂きたく、どうぞ末永い目で新・事務局をみて頂けたら嬉しく思います。今後ともよろしくお願い申し上げます。



東京都行政書士会板橋支部副支部長
賞状書士養成講師

山 名 昭 二

(市中2回生)

〒175-0083

東京都板橋区徳丸1-29-11

TEL/FAX (03) 3932-5855

株式会社 魚長食品
株式会社 ホテル函館ロイヤル

代表取締役 柳 沢 勝

(東高11回生)

函 館 市 豊 川 町 1 2 - 1 2

T E L (0 1 3 8) 2 6 - 1 8 1 1

さようなら

函館東高等学校

幹事長

田村 良人
(東高17回生)



この3月に新しい校名が「市立函館」と決まり、「東の」「北の」と言っていたあの頃を懐かしく思うと同時に、思い出がなくなってしまう訳ではないのに母校の名前が変わるということは寂しいものだと感じています。各地区の同窓会も、今後は新しい動きがみられるのではないかと思います。

私の東高等学校としての思い出は、恩師である担任の先生方と級友、学校行事です。

団塊の世代真っ只中の私の学年は、昭和39年・514名が入学しました。1学年は、地理の岡田貞幸先生が担任でした。今の時代では考えられないことですが、先生はよく昼休みに愛車のブルーバードを磨いておられました。宝物を大事にするように、丁寧にピカピカに磨いている姿が何とも男らしく印象的でした。大学入試の合格目安として国立2期では100番以内を目標とし勉学に励みました。山本信治君と故・熊本幸雄君とは良いライバルで、どの教科でも競い、少しでも順位を上げようと頑張りました。2学年の担任は、現代国語の天野暉彦先生で、一番思い出に残っている先生です。私と大矢長生君が悪さをした時、寛大なるお心で処置して頂き、先生のおかげで皆と一緒に卒業できたのだと思っております。華の応援団長の黒川力君とは、試験前に毎晩、夜遅くまで数学の勉強を一緒に励んだ記憶があります。3学年の時期は「進学か、就職か」の選択をしなければならず、同じく悩みを抱えていた高沢孝義君とは、朝まで話をしました。あれから40年近くが過ぎ、こうやって東高等学校のことを考えると、共に泣き笑ったこと、勉学に励んだことさえも青春と呼ぶにふさわしい3年間でした。

学校行事として「あんどん行列」が一番の思い出でした。クラスの中で製作にあたりテーマ、材料調達、製作と自分達で進めていくのですが、今でいう学校祭のようなものだったのでしょうか。製作中もっとも大変だったのがバッテリーの調達でした。入手がなかなか困難でしたが、あちこち

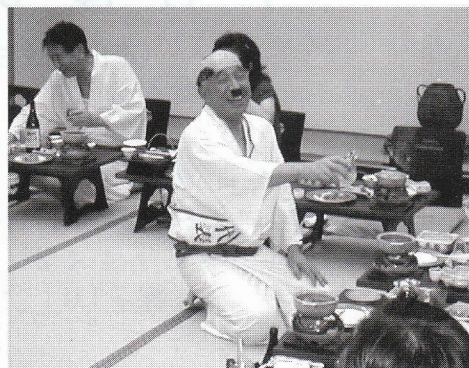
お願いをしてまわり、父母達の協力もあってなんとか入手したことを覚えています。今と異なり、バッテリー自体が大型で、重く、なおかつ使用容量が少ないという、今では使えないシロモノで、ねり歩いて校舎に戻ってくると、ほとんどの「あんどん」がホタルの光のごとくでした。またコンビニもなく、気軽に買うというものではなかったため、重いバッテリーを担いで飲まず喰わずで行進した記憶がとて残っています。ああ、なんと重かったことでしょう。あの頃から40年も経過するとバッテリーも小型で軽量になりました。当時青年だった私には考えられない時代になったものです。今は子供でさえ持っているという携帯電話ですが、20年前には保証金30万円を払って購入し、大型で3kgぐらいあり通話料もとても高く、ショルダーフォン(車外兼用型自動車電話)といい、肩に掛けて持ち運びして使用したもので、とても「手軽に携帯する電話」とは言えないものでした。今では携帯も名刺サイズになり、メール・GPS・テレビと機能が充実し通話時間も当時と比べものになりません。いかに当時のバッテリーの能力が悪いと思われ、また現代の技術の進歩が伺われます。

もうひとつ私の思い出として書かなければならないのは、あんどん行列のあとの学年ごとに行なう「フォークダンス」です。男女共学と言っても、堂々と女子学生と手を握る事は年に数回しかなく、意中の女子がいた男子なら誰でも同じことを考えていたでしょう。私も数回のチャンスの中でなんとか意中の人と…と思いつつ、ドキドキしていたものです。ダンスも始まりあと何人、もう少し、もう少し…と。しかし、なぜかいつも少し手前で曲が終わるのです。音楽は「ワシントン広場」だったと思いますが、今、ふと思い出しても私にとってホロ苦く、甘酸っぱいような思い出の曲になりました。あんどん行列から校舎に帰って来て、さあ、これから通年の慣習でフォークダンスをと思っていたところ、女子の数が少なく、急遽とりやめになったこともありました。これらの行事は青春の1ページとして思い出深いものであり、学校統合となってもぜひ続けて頂きたいものです。

さて、関東地区青雲同窓会も22年目に入ります。同窓会を通じて何点か思い出深い会について書かせて頂きます。

平成14年7月に役員及び各期幹事旅行があり、1泊2日で熱海へ旅行しました。皆それぞれ歳をとり、いろいろな経験をしてきたとはいえ、私としては修学旅行気分でした。あの頃の話、この時はどうだった、そういえばあの人はどうしてる?と、車中での先輩方や同期の人たちとの話は尽きることはありませんでした。中村名誉会長からは、年々増加しているという病気に関する話もあり、病気に対する理解も深まりました。修学旅行では酒はご法度ですが、そこは大人の修学旅行。そこだけが当時と違うだけで、時間が経つのも忘れ、つい酒もすすみ、旅館に入る前

だというのにすっかりできあがってしまいました。会食も楽しいひとりで、山名相談役(市中2回生)のかくし芸にこれまたビックリしました。今でも写真を見返すたび



株式会社 東洋興産

代表取締役 田村 良人
(東高17回生)

東京都豊島区长崎2丁目35番4号
同窓会事務局

TEL (03) 3554-7314

FAX (03) 3554-7313

『さようなら 函館東高等学校』

副会長

笠巻 哲昭
(東高16回生)



函館東高を卒業して40年・東京へ出て36年、年月が経つのは早いもので振り返ると驚きです。最近、年一度くらいお墓まいりを兼ね函館に帰っている。

もはや両親も亡くなり、函館の実家も無いとなると寂しい気がします。

36年前青函連絡船と夜行列車で12時間以上かけて上京、右も左もわからず都会の雑踏に驚きながらの日々でした。休暇を取り帰省する日が決まるとその日が待ち遠しくワクワクしていたものでした。

連絡船が函館港にさしかかると、なつかしい故郷がもう目前です。さも自分が映画の主人公にでもなったように、ステージにいるかのごとく感情が高ぶるのがわかり、函館の土を踏むとまず故郷のしるし(周囲の人たちの)函館弁まるだしの言葉でやっと着いたと実感したものです。しばし市内を巡り歩き、東高を訪れると・・・もう・・・正門・グラウンド・校舎など昔の光景はではなく様変わりしている(当然のことではあるが)。

今思えば、反省ばかりで勉強もあまりせず、とは言ってもクラブ活動を一生懸命やったわけでもなく全く何を考えていたのかと考えてしまいます。

しかし一人で上京し、苦しい時も何とかやってこられたのは、東高での青雲魂がいつのまにか、うえつけられていたと思います。

この度は、東高と北高が統合され校名が変わると聞き大きな時代変革がここまでできていると感じさせられます。

故郷(東高)は時が過ぎているのだから新しく変わってあたりまえなのに、わがままな私は変わらないでいてほし

いと無いものねだりをしているわけです。

そもそも故郷という言葉には感傷的な甘えの言葉が含まれていると思う。

だから甘えないほうがいい・・・故郷(東高)が本当に変わってほしくなければ、自分自身も成長してはいけなくなるからだ。

わかっているのに昔のままでいてほしいと思うのは自分自身の思い出に慕っていたいからだ・・・こう自分自身に言い聞かせております。

これからの新しい教育にむかって発展することを願うばかりです。青雲魂についてはこれからも機会あるごとに語りかけ今までの良き伝統を守りこれからの新しい文化を作っていたきたいと思います。

さて関東地区青雲同窓会には50歳の幹事期の際若干の手伝いをしたのをきっかけに初めて参加させていただきました。それまでは、仕事の忙しさを理由に欠席の連続でした。

最近、総会・新年会・納涼会等都度・都度参加させていただき数多くの先輩や後輩にお会いし時には楽しく時には指導いただいております。

又、この同窓会に出て私の仕事にもかかわる先輩・後輩がいたのにもビックリいたしました。一回生の熊谷明先生(社内でも先生と呼んでいるため)には当社の人材派遣業の関連会社のご指導を頂いておりますし、九回生の水牛食品・保坂社長には40年来のお取引をいただいております。現在はご子息2人も会社の運営にたずさわっておられ、たまにはご子息も入れて食事をさせていただくこともあります。

後輩で十二期のAPOネットワーク社長・安達さんには当社の食のコンサルタントとしてご指導いただいております。同期(16回生)のメンバーでは厚谷延実・金田誠一・檜森兄元とも時には杯をかたむけたり、新山会長にも同席願ったりと、今までになかった新しい世界が開かれたと思っています。感謝・感謝でいっぱいです。

これからは、恩返しのため微力ではありますが同窓会を盛り上げられるようがんばりたいと思います。

医療法人 戸田中央総合病院グループ会長
戸田中央高等学校看護学校長

医学博士

中 村 隆 俊

(市中2回生)

関東地区青雲同窓会名誉会長
埼玉県戸田市本町1-22-3
TEL (048) 442-1111
内線710(会長室)

器・Gallery

ちとぎ

代表 中 村 悦 子

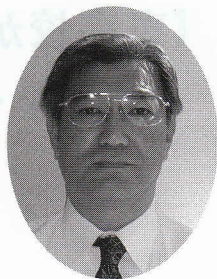
(名誉会長夫人)

〒145-0071
大田区田園調布2-42-18
(田園調布駅前)
TEL (03) 5483-8286

『合併後の 同窓会へ向けて』

次期幹事

藤本 智志
(東高25回生)



私は、本年5月の関東地区青雲同窓会総会以降の一年間幹事を務めさせていただきます東高25回生の藤本智志と申します。

私が、この同窓会に参加するようになるまでには、数多くの偶然が重なり参加することとなりました。まず函館東高校との出会いですが、私は同期生438名の中でたった一人の伊達中学校卒業生でした。父親が地方公務員でしたので、何時転勤しても大丈夫なように、年子の兄と二人で親戚のいた函館の高校へ進学させたかったのでしょう。兄が函館中部高校へ進学し、翌年私の番でしたが、小中学校と兄といつも一緒だった私は、兄とは別の高校へ行きたかったのです。しかし、函館の高校については何の知識もなく、中学の担任教師もまったくわからないとのことで、結局、函館の親戚に問い合わせた函館東高校がよいだろうとなり。ここで初めて函館東高と出会いました。

そんな訳で、無事東高へ入学した私は、兄が住んでいた時任町の下宿に入り学校へ通うことと成りましたが、運動も芸術も苦手な私はクラブ活動もせず、下宿と学校の往復だけで日々を送っておりました。その上、二年の秋からは両親が大野町(現北斗市)へ転勤となり、その後は汽車通学でしたので函館の町についても観光バスが案内する程度のことしか知りませんでした。

このような、高校生活を送っていた私ですので、大学へ進学してその後、知人の紹介で戸田中央総合病院へ就職してからは函館へ帰る機会もなく、東高との音信もなく同期会・同窓会の案内もなく、函館のことも、高校時代のことも懐かしむことなどまったくありませんでした。

そんな私が、この同窓会へ出席するようになったのは、戸田中央総合病院グループへ就職して何年か経った頃ある部長に、「君は函館出身だと聞いたが高校は何処を卒業したのか」と聞かれ、「函館東高校を卒業しました。」と答えると、「それじゃ 中村会長の後輩じゃないか!!」と教えられびっくりしていると、さらに病院に東高校の関東地区青雲同窓会事務局があり、病院の会長が同窓会の会長でもあるとの事でした。

この部長は、しっかり報告をしたようで、私は第3回の総会から納涼会・新年会と回を重ねることになりました。初めの頃は殆んど同期の方も出席がなく知った方も殆んどいらっしやらないので、つまらないと感じておりましたが、何回か出席するうちに顔や名前を覚えてくださった先輩から暖かい言葉をかけていただくようになり、いろんな方から函館のお話を伺うにつれ、しだいに楽しみになってまいりました。

また、この回はみんな50歳で年度幹事として一年間幹事を務めることになってるので早めに同期生を集めておくようにと多くの先輩よりご忠告をいただきました。平成6年には関東地区青雲同窓会会員名簿が作られ同期の方々にお誘いの電話をさしあげた時には、皆さん仕事や育児にお

忙しく全員欠席でした。

—昨年同じく幹事期の同期生集めに苦勞をなされた23回生の高橋喜宣先輩より、いろいろな苦勞話や誘い方などお伺いしまして参考にさせていただき、本年の新年会にて来年度の幹事期のお願いと合わせてお誘いしたところ初めて7名の同期生の方々が出席くださり胸をなでおろしております。また、次回総会には、同期会も合わせて行いより多くの協力者を募りたいと考えております。

我々25回生は、来年4月の函館東高と函館北高との統合が済んで、初の総会の幹事を務めなければなりません。これからはおそらく慌しい一年になると思いますが、卒業生として是非東・北両校の伝統が融合した新しい市立函館高校が生まれますようお願いしております。そして、これから卒業される同窓生の方々を我々が、諸先輩からいただいた暖かさより以上の気持ちを持って迎えられる同窓会として、更なる発展を願い新たな第一歩を踏み出せるよう、役員の皆様はじめ諸先輩のご助言をいただきながら、微力ではありますが、精一杯頑張りたいと思っております。

同窓生紹介

星 滋子(旧姓 太田)

(東高11回生・昭和36年卒)

星 滋子さん 63

中国人に日本語 ■ 名作使って授業

中国・山東省の中美山東建文
大学で四月月間、日本語講師を
務め今月帰国した。中国に行く
のは今回で九回目だが、テレビ
で見かける日中間のあつときは
一度も感じない。帰国国際、生
徒たちは無理を承知で引き留め
た。「結婚式を受ける時にも来
てほしい」と言われた。行つて
きて良かった。

青森県で生まれ、小学生のこ
ろに函館へ。現在の道教大函館
校を卒業後、函館東高校で国語
教諭を三十四年間務めた。教科
書には載っていない名作で授業
をしたい思いがずっとあった
が、進学校では難しかった。
教師時代仲間らと計八回、
中国の重慶や成都、西安などを
訪問したが、宿泊中のホテルか
ら散歩で外へ出ると「日本を
教えてください」と中国人が
日本語のテキストを押し付けられ
た。これが一度や二度でいい
うえに懸命な様子だったため、
同大学で二〇〇三年に日本語講
師をした知人の依頼で引き受け
た。

教室には教壇がなく、生徒の
顔を見上げて話すこともあ
た。一クラスの人数は十五人
後と少なかったため全員に目
行き届き、名前もすぐに覚え
中には就職に有利だからとい
理田で教壇にいる居眠り
もいたが、大半の学生は将来
訳士や翻訳家になる夢を持ち
日本語の上達に励んでいた。
村、太宰治などの好きな作品
題材に選り、読解や会話、作
を教えた。新美南吉の童謡「
んきつね」を朗読中に、朗読
引き込まれた生徒の一人が「
生、づ」は死にやうなすふ
と声を出した。うれしかった
(久保古史)

ここに生きて

り、法案は否決された。

重要法案が否決されたことから、社会科の俵先生から、「内閣（生徒会役員）総辞職ものだ。」と言われたことも思い出だ。

やむを得ず、憎き3年生を追い出し、新しい1年生を迎えた5月に法案を再上程し、圧倒的多数で成立させることとなった。

以上が、大まかな流れだが、ときが流れ、同窓会の席上で、憎かった1年先輩と話をする機会に、「反対のための反対ではなかった……」などと聞くと、「上級生としても、真剣に考えていただいたのかなあ……」

因みに、卒業してから東高校付近に行くと、懐かしい制服を見ることもできず、ちょっぴり寂しい思いも……

将棋団体戦で初の函館1位

当時の小生の趣味は、小学校に入る前に父親から教わった将棋だった。

しかし、高校入学時には、将棋部はなく、同好会だった。

それでも、函館市内の対抗戦に毎年出場することに意義があるとの思いから参加していた。

そして、同好会から部に昇格したあとに、市内対抗戦が東高校で開かれ、何と、団体戦（1チーム5名で構成）で優勝することになってしまった。

それまで、当たり前のように、将棋は、（お頭の良い）ラサールか中部が優勝していたので、大きな珍事としか言いようのないことだった。

その内容も、初戦から決勝戦まで、全て3勝2敗（小生の2歩による反則負けも含む。）のギリギリの内容だった。優勝が決まった瞬間、うれしいやら、驚くやら、恥ずかしいやらだった。

ちなみに、個人戦では、小生の準決勝進出が唯一だったことから、実力者が多かった訳ではなく、まさしく、東高校の団結力の勝利としか言いようのないものかもしれない。

可愛い女の子と話がしたくて合唱部に入部

以上のように、さまざまなことに手を出しながら、2年生になったときに、合唱部に入部したことも思い出だ。

合唱は中学校（旭）のときに、当時の音楽の先生に引きずりこまれやっていたが、決して好きなものではなかった。（今、カラオケは好きだが）

入部の同期は、単純に、「可愛い女の子と話がしかつから」である。

多感な時期とは言え、「動機は不純」そのものである。そして、当初の目的を達成して、楽しい高校時代を過ごすことができたのは、いい思い出である。

函館東高校よ永遠なれ

教室内に雪が舞いすさぶ校舎も、建て替えられ、今また、北高校と統合され、函館東高校の名前が歴史から消え去ろうとしていることを思うと、感慨無量である。

少子高齢化の結果とは思ってみても、「残念」の一言である。

しかし、青春を過ごした函館東高校は、永遠に、小生の中に残ることは確実だし、この思いは、同窓生の誰しも共通だと思う。

北高校と統合して、更なる前進を願うものである。

『東高校が

なくなるとは…』

当番幹事

千歳 芳充

（東高24回生）

関東地区青雲同窓会も今年で発足22年目になり、今年は私たち24回生が幹事期となり総会の準備を進めています。あと一年弱で、我等が母校の北海道函館東高等学校の名がなくなるため、母校からの来賓の名称（東高校）が今年の総会で最後になると思うととても寂しく感じます。そこで、私の東高校在学時の思い出をご紹介します。

私は、今は無き「谷地頭小学校」から「潮見中学校」へ、そして東高に進みました。

今回の北高との統合による名称変更で母校のうち2つの名称が消えてしまうのが非常に残念です。でも、皆さんの中には今回の統合で、卒業した小中高校全ての母校の名称が消えてしまう方もいるのでは？残念ですがこれも時代の流れと言わざるを得ませんね。

私の期は、潮見中学から東高校に進学するのは少なかったため、期待と不安を胸に入学したのを今でも忘れません。でも2年生の修学旅行の事も忘れられない思い出でした。

それは、私たちの修学旅行が台風により延期になったからです。私の同期の方でも覚えている方は少ないと思いますが、吹奏楽部にいた私にとって生涯忘れる事のない事件でした。その年は吹奏楽コンクールの函館地区予選と修学旅行のスケジュールが重なっていたのです。前年に北海道大会のコンクールで優勝していたので、函館地区予選と修学旅行のどちらを選ぶか3年生と我々2年生の部員全員が悩み話し合い、結局修学旅行に行くことにしました。しかし、当日台風が来て修学旅行が延期となったため、コンクールに出場出来ませんでした。修学旅行はその後日程を変更し行われましたが、たまたま私の誕生日と重なったため、旅行中に友達に祝ってもらったことが、私にとって一番の思い出になりました。まだまだ東高の思い出は尽きませんが、今回はこの辺で……。

皆さんも、是非同窓会に出席して思い出話に花を咲かせてください。

阿倍啓一、伊在井寛、石川（大宮）恵子、市岡和雄
一柳弘一、井下清倫、梅津敏生、大谷浩、岡真一
小濁（渡辺）昌子、小田光博、金谷正夫、上根弘之
川崎（片桐）由美子、計良英城、小窪（太田）佳奈子
小島秀樹、児玉（丸野）雅子、小松裕司、金野（百足）礼子
坂本栄人、佐藤（梶原）智子、佐藤文夫、塩谷（片山）有子
下井（角）里美、須釜（山口）恵子、杉林俊彦
鈴木（西山）素代、鈴木祐輔、関根（岩崎）弘子
高田（藤岡）由美子、滝田俊実、竹内清、竹内（小浜）羊子
田中雅人、田中（森）美枝、種市優、田原（三品）実枝子
千歳芳充、中田（山中）早苗、成田光隆、西村（八田）智子
野口（中里）恵子、濱谷淳子、久末敏樹、干場千治
松田（伊藤）邦子、三澤（堀田）智里、道下政弘、武藤勇
村井知則、村田堅一、村本真司、本吉（宮崎）孝子
山田明子、山名貴之、湯本（上野）ひとみ、吉川範明
渡邊晃樹

関東地区青雲同窓会東校二四回生

底、無理というものだ。御詠歌・和讃の類は、日本全国、無数にある。その領域を専門に研究している学者・専門家ならともかく、素人が、たとえ広島、函館近辺だけに調査範囲を限定したところで、とても仕事の片手間に調べ切れるものではない。しかも、話の性質上、第三者に調査を依頼することは、はばかれる。検証不可能な証拠は、本質的に証拠能力を欠いている。ということでこの件に関するQ先生とのやりとりにはケリをつけた。

Q先生は、こうした話を印刷物として世に残そうかどうかと、最後まで迷っておられたようだったけれども、結局、沈黙したまま世を去った。従って、当方も、個人的「秘話」のままにとどめておこうと思っていたのだが、校歌が変わってしまうということになった今では、もう、歴史的エピソードとして披露してもいい「時効」を迎えたと考えた次第である。

関東青雲同窓会で東高校歌を斉唱するたびに、そんな記憶がよぎる。

あれやこれやがあるにせよ、ないにせよ、現実の東高校歌は大好きである。ともかく母校の校歌として、わが人生を通じこの歌を唱ってきたのだから。

同窓会では、元気な大先輩たちが、「とき肇国の源遠く、紀元2000年……」と、市立中学校創立当時の校歌を歌う。東高校校歌も、OB、OGが元気な間は、同窓会で歌い継がれるだろう。

ところで、これも「校歌秘話」風の話だが、東高校校歌の歌詞が、かの世界的名曲「軍艦マーチ」のメロディーにそっくり乗るということを御存知だろうか。まさかと思う向きも多いかもしれない。だが、ちゃんと「軍艦マーチ」のメロディーで歌えるのである。一度、カラオケででも試してみたら面白いだろう。人によっては、この方が、「青雲の志」に似つかわしい勢いのあるダイナミックな校歌になると思うかもしれない。

また、函館でも関東でも、同窓会総会の定番の一つとなっている第一応援歌の歌詞は、戦時中の軍歌の仲でも音楽的に最も優れているとの評価が高い「空の神兵」のメロディーに乗る。「藍より青き大空に……」という出だしの歌である。これもカラオケのメニューには必ず載っている。リフレインの部分は若干の技術的調整を要する。カラオケに誘ってもらえれば、その技術を伝授する。東高校校歌は、校名が変われば変えざるをえないが、「栄ある学舎、青雲の……」という第一応援歌の歌詞は、主校舎が青雲台にある限り、そのまま通用する。

などとばかり言っていると、軍国主義者と誤解されかねないので、もう一つ、校歌の歌詞が乗る歌を挙げておく。外国の歌だが文部省編纂唱歌系の歌集に入っている「故郷の廃家」である。小、中学校時代に習ったことがある人も少なくないだろう。「幾歳、故郷、来てみれば……」で始まるあの歌だ。東高校は「廃校」になるわけではなく、校名が、いわば、発展的に改称されるといったところだが、歌い慣れた校歌は「廃歌」となる。「故郷の廃歌」などとシャレしてみても、なんとはなしにうら寂しい思いが増すだけのようでもあるが……。

ちなみに、これも総会での定番である第四応援歌のメロディーには、「浦島太郎」の歌詞が乗る。「昔、昔、浦島は、助けた亀に連れられて」という歌である。ちなみついでにいえば、第一応援歌は、「もしもし亀よ、亀さんよ」の「亀と亀」の歌詞で歌うこともできる。これも若干の調整技術を要するので、知りたい人は伝授料として、一夕、場を設けてくれたまえ。

32年振りに集まれ 昭和49年卒業生



当番幹事

竹内 清
(東高24回生)

昭和49年春に函館東高校を卒業、「若い時期を東京で過ごす。」と上京した際は、32年間も住みにくい東京にいるとは到底考えていなかった。

光陰矢の如し、50歳になる年の「宿命」として、関東地区青雲同窓会の幹事期を担当することとなり、平成17年8月27日(土)の納涼会には、同期のメンバーに声をかけ、同期20名以上が参加した。

納涼会の受付では、「どちら様ですか。」などと言うこともあったが、名前を聞き、懐かしさのあまり「感無量」的一幕も。

特に、上京以来会っていない多くの女性が、(子育てを卒業して)参加していただいたのが特徴だった。

同年9月30日、金曜日に開かれた同窓会札幌支部総会には、同期の千歳君(同窓会運営では、同期メンバーの中心バッター)と参加、高校時代には話をしたこともないメンバーと深夜まで盛り上がりってしまったのも思い出だ。

札幌では、同窓会運営で頑張っていた同期の川村君に焼香する寂しい思いもしたが……

11月20日の日曜日に行われた同期会では、(小生は所用で参加できなかったが)日本の代表的文化(?)のカラオケで大いに盛り上がったと聞いている……参加できず残念

そして、今年1月28日(土)の青雲同窓会新年会では企画段階から、多くの同期のメンバーが参加した。

その楽しい(?)幹事期の仕事も、来る5月27日(土)に行われる総会をもって昭和50年卒業メンバーに引継ぐこととなっている。

この1年、たしかに忙しいことも多かったが、日々の仕事では味合うことのできない楽しい時間を過ごすことができたのは実感。

総会には、より多くのメンバーに参加してもらい、慶びを共有したいと思っている。

制服自由化

高校時代の思い出は、何と言っても、制服自由化問題だ。

制服自由化であって、制服制度廃止では決してない。何の因果か、小生は、可愛らしかった女性にせがまれ、2年生のときに、なかなかのことのできない生徒会長になってしまった。

当時(昭和47年)は、田中首相の日本列島改造ブームの最中であったが、同時に、制服自由化の波の真っ只中にあった。

何度も、生徒会内の会議が行われ、「制服の是非」について、先生達や親の意見も多く寄せられ、48年春、生徒総会に「制服自由化法案?」を提出することとなった。

しかし、卒業を間近に控えた3年生の多くが反対にまわ

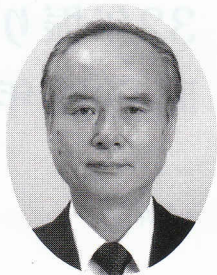
今蘇る“校歌秘話”

「さようなら函館東高等学校」

顧問

朝倉 敏夫

(東高10回生)



東高校が北高校との統合により校名が変わってしまうという。いささか寂しい。が、北高の同窓生はもっと寂しいだろう。東高出身者にとっては名称が変わっても母校が青雲台に存在し続けることには変わりはないが、北高側では、校舎も無くなってしまう。

東高、北高に共通するのは、校名変更に伴い校歌も変わってしまうということだ。校歌についても、人それぞれの想いがあるだろう。私にとっても、人生のいろいろな時期、場面に結びつく感傷を誘われる歌である。その校歌が校歌でなくなるというので、ごく個人的な、ある“校歌秘話”体験を綴っておきたくなった。以下、一種の戯文と思ってもらっている。

同窓会というものの楽しみは、その場を通じて、日常の職業生活とは無縁の、さまざまな出会いがあるところだ。私など、現在、読売新聞社の論説委員長として顔が広いようなフリをしているが、実は、政治記者人生の日常的人間関係など、永田町と霞が関に限られてきたみたいなものだ。同窓会には、さまざまな世界で生きてきたさまざまな人たちがいる。

そんな同窓会という場で、ある年、関東青雲総会の恩師ゲストとして出席したQ先生と、三十余年ぶりに、出会った。

Q先生には、東高校時代、授業を受けたことがある。なんととはなしに、存在自体がユーモラスな人だな、といった印象はあったものの、個人的に話をしたことなどなかった。それが、その同窓会総会以来、頻繁に個人的書簡を交換する仲になった。いわば50歳にして蘇った師弟の縁といったところである。もちろん、この時すでに、Q先生は、かなりの高齢だった。

往復書簡の内容は、イデオロギー問題、宗教論から世事諸相万般にいたるまで多様だったが、そんな手紙付き合ひのなかで、ある時、Q先生が「東高の校歌の歌詞は、盗作の疑いがある」と書いてきた。

最大の根拠は、昭和30年代の初め、広島から赴任した新人教師が、広島大学以前の「旧制高校時代の寮歌とそっくりの歌詞なので驚いた」と言った、ということだった。また、それが真実らしいと思える傍証が数々あるとして、東高校歌の募集から決定に到る様々な経緯、その前後の周辺状況について、分厚い封筒を何回かにわたって送ってきた。長年にわたる鬱憤がほとばしり出た、という感じだった。

その詳細をここに再録するわけにはいかないが、当方は、

新聞記者の本能として、直ちに調査してみたくなった。

調べるのは、さほど難しいことではない。広島大学から旧制当時の寮歌・応援歌集を取り寄せて点検すれば済む話だったからだ。Q先生がそれをしなかったのには、Q先生なりの複雑な理由があった、ということなのだが、それはさておき、結果として、それらしきものはないことがはっきりした。Q先生の疑いは、新聞記者風にいえば、裏を取らない思い込みだったのである。

ただし、Q先生は、疑いの範囲として、もう一つ、歌詞の内容が、仏教、とりわけ浄土真宗の教徒集団の御詠歌・和讃に似ている、ということを挙げていた。広島は歴史的に浄土真宗の盛んな土地であり、寮歌にもそれが反映しているかも知れないし、寮歌ではなくとも、土地の御詠歌・和讃の歌詞だった可能性もある、としていた。

指摘されてみれば、この校歌の歌詞全体には、御詠歌・和讃的な雰囲気や濃厚に漂っているような気がしないでもなかった。

たとえば、一番の歌詞にある「同じ思いに相寄りて」といった表現である。これは、古今東西を問わず、宗教集団に共通する発想、常用語にも思える。

二番目の歌詞にある「契りし三年、この宿り」という部分も、考えてみれば、ちょっとおかしい。旧制高校の全寮制でもあるまいし、といった“論理逸脱”的な印象とともに、信仰同胞衆の研鑽空間的な用語といった感じもする。

三番目の歌詞に至っては、始めから終わりまで宗教歌そのものではないか、と感じたりしてしまうのである。

まず、1～2行目の「流転の姿移り行き、人の運命はめぐるとも」という表現からして、仏教誕生の背景となったインド的輪廻転生観、あるいは仏教の本質的特徴の一つである無常観をモロに表現しているような気がしてしまう。

これに、3～4行目、「尚永久に向上の、聖き使命にいそしみて」が続くと、真の信仰の境地へと向上するよう、聖なる信仰護持・深化・流布に励みます、といった意味のようにも読める。それはさて置いても、そもそも「聖き使命」などという用語は、宗教世界的言語感覚なのではないか、など思ったりしたものである。

最後の2行、「只一筋にひたすらに、誠の道を行かんかな」は、以上のような観点にこだわると、これはもう、信仰誓言そのもののような響きである。宗教・宗派というものは一般的に、他宗教、他宗派との絶えざる“競争”にさらされている。皮肉な見方をすれば、これは、他宗教、他宗派からの誘惑には屈せず、わが宗派の「誠の道」だけを信じます、と言っているようでもある。

観点が異なれば、単に学問的な真理を究める道に専心するという意味だということになる。が、高校という青春真っ盛りの時空間に、「只一筋にひたすらに」それを求めるということにも、なにやら違和感が伴う。

とはいえ、これは、そう思ってみれば、そう読めなくもない、という話である。だが、これについて点検するのは、到

(平成18年3月15日 函館市教育委員会決定)

統合校名「市立函館高等学校」

- ・校名選考の経過 平成17年8月29日に「校名検討委員会」を設置し、一般公募や両校の募集で寄せられた366件の校名の中から、5つの候補の校名(市立函館高等学校、市立五稜郭高等学校、函館市立青稜高等学校、函館市立巴高等学校、函館青雲高等学校)を選定し、函館市教委に報告した。
- ・教育委員会では、市民及び両校の同窓生の思いや大きな期待が込められたものであることから、次の理由から校名を決定した。

- 一般公募と両校での公募に応募された校名候補の中で、とりわけ多くの方から応募があり、広く函館市民から支持されている。
- 両校の伝統を引き継ぐとともに、市立高等学校としての誇りをもって新しい歴史を築くのにつながる。
- 函館市民にとって親しみやすく、覚えやすい。

函館東高等学校のホームページより

詳細は同ホームページを参照ください。

<http://www1.ncv.ne.jp/~h-higasi/>

就任一年目

会長

新山 春一
(東高11回生)



関東青雲同窓会、会員の皆様、元氣でご活躍の事と推察申し上げます。会長に就任してから丸一年が経過致しました。私に課せられた課題は、同窓会の運営と、活性化でありました。

運営に関しましては、昨年の総会後の6月1日に、中川副会長、田村幹事長と共に、戸田中央総合病院、院長秘書室で、資料の受け取りを行い、田村幹事長の会社へ運び込みました。

また、中村院長先生には、会から感謝状を送らせていただきました。

過去の膨大な資料は、東洋興産の営業室、及び倉庫に保管しました。移転した翌週からは、土曜、日曜日、

役員が新事務所に出勤し、一件づつ精査しながら、整理を始めました。特に苦労したのは、会員の登録及び、会員の入会状況等を、パソコン化する事でした。

21回生の国井澄子さんに、仕事を持ちながら、2000余名の登録をお願いしたところ、心よく受けていただき基盤が完成しました。その後、それを基に、中川副会長、高橋会計幹事、今年度の幹事期の千歳氏が中心になり、バージョンアップをはかりましたが、ストップする事も多く、田村幹事長のお嬢さんの、江波戸ひとみさんに、会社の仕事の合間をお願いして解決するなど、悪戦苦闘でした。昨年9月頃には、基本的なプログラムが完成しました。

また、会員相互間の活性化の一助として、ホームページを、高橋会計幹事を中心に立ち上げていただき、最近は、アクセスも多くなりました。詳しくは、高橋会計幹事が後述します。

また、幹事当番期の24回生は、昨年の総会以後土曜日、または、日曜日に予定表を作成し(基本的には、土、日は休日である。)事務局に提出して了解をとり、毎回3、4人が集まり、会員および、同期会員の増加を計るべき頑張っています。その結果、新年会の出席は80名を越える人数となり、その努力に感謝しています。

また、次の幹事期の25回生藤本氏が、今年度幹事期と準備状況等の、ノウハウを確認しながら、同期にも連絡をとり、過去1名の参加であった新年会も、今年度は8名の参加があり、来期も順調に引き継がれる事を確信しました。

しかし、26回生については、過去出席者がほとんど無く、今後、役員、幹事団、函館本部等の応援を得て、当番幹事期が途切れない様に、したいと思っています。26回生の方々、是非事務局へご一報下さい。お待ちしております。



戸田総合へ感謝状

さて、昭和15年開校して以来、来年3月末で67年の歴史を閉じる母校に、昭和36年卒業以来45年ぶりに、今年1月20日に訪問しました。当日は、雪が多く、また、歳のせいか、柏木町電停から校舎まで若いころの、倍の距離を感じました。在籍したころの正門も、野球場も、車道となっており、時の流れを感じました。

その日は、受験申し込み受付日で、ご多忙の中、森校長、教頭先生、幹事長さんと校長室で、お話することが出来ました。最近の、進学や体育会についての状況、卒業生の動向について、解散した1回生からの絵画の寄贈等について、会話をしました。特に北高との統合に関しては、校章、校歌、同窓会等、難問が多く、ご苦労されている様子でした。ただ、統合後も、現校舎敷地を、使用する事が決まっている為、卒業生にとっては嬉しい限りです。

関東地区青雲同窓会も、統合後名称の変更、校旗の変更、文書類の変更等を、来年3月までに処理する作業があります。

次に個人的な事ですが、昨年10月13日にイタリアにアトリエを構えて活躍し、当会会員でもある18回生、小寺真知子氏にローマ市内で再会しました。

過去関東支部の総会には1度出席されており、また三越本店で個展開催時には(1998年11月)当会に案内があり、会を代表してお祝いに駆けつけ面識がありました。



小寺真知子氏とH17.10.13イタリア「ローマ」市内

小寺氏は、函館出身、道教育大学函館分校(当時)彫刻を専攻し、1980年からローマ美術アカデミアで学び、具像のブロンズや大理石像を中心に活動しています。1998年に「三つの時代」像で、現代日本具像彫刻展で大賞を受けました。その後は各地に各作品が展示され、国内では100体以上になっています。

再開時の昨年10月は、11月12月に函館市図書館、函館空港に設置する作品の追い込み時期でご多忙の様子でしたが、快く時間を作っていただきローマ市内及びヴァチカン市国を案内して貰いながらローマでの生活、函館に対する思い、作品を手がけるまでのイメージづくりの苦労等、異国の地で青雲魂を発揮していることがよくわかりました。

最近の作品としては、平成14年5月18日に函館病院跡地にペリー提督のブロンズ記念碑があります。また、昨年11月12日には函館市図書館及び函館空港にそれぞれのブロンズ像が設置されています。

今年は群馬県からアダムとイブの作品依頼があり、打ち合わせの為一時帰国の予定があり、5月の総会に出来るだけ調整して出席したいとの意向でした。

最後になりましたが、同窓会は日頃は交流も少ない同年代の同窓生との再会を可能にし、同期はもとより先輩や後輩の間に知人を増やし、交流を通じて新しい流れが出来る場を提供するものと思います。

今年度も年3回の行事は継続し、また新校名に伴う作業については皆様にご協力ご支援を得ながら処理すべく頑張る所存です。

本年も宜しくお願い致します。